

近年は牛肉の自由化で農家を苦境に陥れているばかりか、酪農家の雄肥育による収入が見込まれなくなった。これに円高が追打ちをかけ、牛肉の自給率は1965年に95%だったが、1992年には50%を切ってしまった(1993年は42%)。和牛だけが頼りのように考えているようだが、牛肉輸出国ではすでに和牛の導入と飼育テストを始めたから、この自給率低下には歯止めがかからないだろう。

乳製品については半数近い国民になじまないから、消費拡大には限界があると前述したが、加工乳の多い北海道では、町村ごとに特色のあるチーズを作って売り込むのが将来性ありと考えている。また酪農家は酪農一本では展望がないから、牧草地を7年更新するついでに、畑作物の導入とくにバレイショとマ

メ類の導入をするよう一部に勧めている。

h) 魚 貝

つい10年前に自給率80%以上あったが、急速に低下している。古来魚好きの国民で、四方を海に囲まれて資源豊富なのだが、遠洋漁業の道が年々狭められ、近年は制限量内でトン当たり75万円を支払ってとらせてもらう。鯨1頭を仕止めれば1部落が1年間潤うといわれたが、いまは調査捕鯨さえままならないのである。世界一の魚輸入国のわが国が、国際の名のもとにエサにされているようだ。ゴルフ人口と同様にツリ人口が1,000万人といわれ、日本中のどこでも漁業権の侵害が行われているのも気にいらぬ。野鳥に糸やハリがからんでいるのを見ると、とくに腹が立つ。

—次号に続く—

★農・だれのために

(朝日新聞/平成6.6.14から)

青森県木造町はコメの多収地域で10アール当り600~660キロもとれる。2.5ヘクタールを作る深山さん(仮名=32歳)の場合、平年並みの収穫で約400万円だが、農機具の借金や土地改良の負担金などを差し引くと半分ほどしか残らない。“このまま続けても…もうその気になんねえ”……深山さんは都会に出て働くことを考えている。

かつては家計を支えるため夫婦で出稼ぎをし、半年で200万円もためたこともあったが、この不況でそんな良い仕事はなくなった。季節労働者の再契約は殆どない。とくに去年のコメ作は10アール当り120キロで収入は100万円をきった。父親から借金が1000万円以上あることも聞いた。

“農業をやめるしかない”のだが、深山さ

んはこれを家族に言い出せずにいる。同じ町のSさんは、出稼ぎ中心の生活で、コメ作りは合間仕事になってしまったし、両親の入院で遠出の仕事は無理となった。

それなのに今、週休2日とか残業減らしなど「時短」が社会の流れになってきた。コメの値段は上がらないし、出稼ぎの場所も狭くなってきた。農業はだれのために……深山さんのため息は大きくて深い。

＜投稿をお待ちします＞

●当財団では、いも類振興に関する皆さまからのご寄稿をお待ちしています。いもの作付・育成から食事法まで、氏名・住所・職業を明記のうえ、幅広い範囲でのご意見をお寄せください。

●原稿は600字~1200字で当財団あてにお送りください。採用原稿には当財団の定めによる薄謝を呈します。ご協力のほどをお願いいたします。